

学校経営のポイント

競技スポーツでの“活躍事例”の活用

若井 彌一

スポーツの世界で、年少または若年の人々の活躍が注目を浴びている。国際大会としては、冬季ユース五輪（オーストリア・インスブルックで開催）のジャンプ女子の部で、高梨沙羅（北海道・上川中学校）が2回とも76.5メートルを飛んで金メダルを受賞した。また、ジャンプ男子の部でも、佐藤幸椰（北海道・札幌日本大学高校）が、77メートル、73メートルを飛んで銅メダルを受賞した（ともに、1月14日）。

順調に伸びなくても工夫のある努力を促す

しかし、順調なように思われるときが、スポーツの世界では長くは続かない。それが、アマチュアであれ、プロであれ、競技スポーツの世界の厳しさである。

昨年12月25日、フィギュアスケート全日本選手権大会（大阪なみはやドーム）の女子フリーの部で浅田真央（中京大学）が、ショートプログラム2位からの逆転で優勝を飾った。

この選手の場合、バンクーバー五輪（2010年2月）で銀メダルを受賞したものの、その後、思わしい好結果を出すことができずに苦しみ、また、母親が亡くなるという大きな精神的苦痛に耐え抜いての優勝であったことから、会場は祈りに近いような雰囲気であった。

「流れるようなスパイラルで演技を終えた浅田を、総立ちの大観衆が包んだ」と、報道は会場の様子を伝えている（平成23年12月26日、『朝日新聞』）。

同じくトップに立つのでも、福原愛選手の卓球全日本選手権での初優勝（1月21日、東京体育館）は、また、ひと味違った意味（重み）をもっている。

ひと味違った福原選手の全日本選手権優勝

3歳から卓球を始め、小学校5年で早くも全日本選手権に出場し始め、「天才少女」と注目されて、その後、数々の大会で力を発揮してきた。オリンピックにも、3大会連続の出場が決まっている。

しかし、不思議な気もするが、全日本選手権での個人優勝は13度目の挑戦で初の快挙である（1月22日、『毎日新聞』等各紙）。本人にとっては、じつに大きな「挑戦の山」であったと思われる。

頂点に立つ喜びは、負けてもくさらずに、自分の足りないところ（弱点）はなにかを冷静に見直して、その弱点を徹底的に補強するという試練に耐え抜いた者だけが味わうことができる。

説明するまでもなく、小・中学校等での「体育」「保健体育」は、対外試合での競技力向上を直接の目的としているわけではない。

しかし、走・跳・投等の基礎的運動能力を鍛えたり、それ以前のより基本的な運動能力を向上させるにしても、また、他の教科・科目の指導に際しても、これら同年代の人たちの活躍のウラには、例外なく「継続的な練習」、しかも「自発的な工夫の伴った練習」が積み重ねられていることを事例的に紹介・解説してやりたい。

知識を獲得したり、技能を向上させたりする「学び」は、その目標が明確に意識されるならば、苦痛ではなく、むしろ達成感や満足感の強いものとなる。学校での「学び」をそのようなものとする大きな力ぎは、指導者の磨かれた指導力にかかっている。

（わかい・やいち＝上越教育大学長）

本紙は<http://www.kyouiku-kaihatu.co.jp>でも掲載

●最新刊好評発売中！

学校行事，職員会議，学級，保護者会等での3分間例話！

教師のためのスピーチ・あいさつ実例集

【編集】輿水 かおり（玉川大学教職センター教授）

四六判 208頁／定価 1890円

研修誌・図書の小社への直接注文は、無料FAX 0120-462-488をご利用ください（24時間受付・即日発送）